



源氏物語抄

貞



先も都より小登へ又あつてはなれあゝの事も大ねう  
りちてあゝおろしと二条の上とあゝあゝ  
の契もけりや又落葉れなれはこゝをたふすやと  
心へきれ

三條上

あゝれもいふ事なれは

大ね

阿もやなれは

仔細もかりし事なれは

なれは

小登へりて又あれは



いふくたに人ぬしにせむの  
まゝふあゝゝゝゝゝゝゝゝ

これたのふおとあゝゝゝゝゝゝゝ

朝夕のあゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふう自十の比も又大将小燈へおとゝゝゝゝゝ  
あまれすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
庵ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

は心ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゆゝゝゝゝゝ

友衣ゝゝゝゝゝゝ

志ゝゝゝゝゝゝ

よふふきしてつらねはよ一條れをたつたれしつらねの  
見られぬともくはななりつらねのつらねのつらねのつらね  
見し人のけすつらねのつらねのつらねのつらね

いさやとつらねのつらねのつらねのつらね

此一條れ宮を大將つらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

おちと  
れろつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

おちとつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

人つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

一條れつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね  
つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

こゝろはしつゝもてなるよこゝろりかたすすはしつゝも  
祈りてつとめて守れ

うきみこひちのあきこきあは夜ふ  
まゝいしつゝあせまはれいと戸を

大将三條殿より御入をたまはる人なる物よきもあは  
すもあつてあつてにまゝにみゆるの言を秘言におき  
あり御もまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
あつてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あゝまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
けまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
あゝまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
くまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
神をいませ

三條上

あゝまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

大お

藤葉にけふいよあひるめ花月ち〜れなま志ち是  
るても心結まてたちちの沖〜

おとし  
契あねや君〜心よと〜あお〜

あまねと〜心よと〜あお〜

な  
あまねと〜心よと〜あお〜

あまねと〜心よと〜あお〜

かめ夕雲れはらる人菱内結女と二條のう〜万これを後祿  
おとし心結まてたちちの沖〜

ゆる

おとし心結まてたちちの沖〜

人のう〜心よと〜あお〜

おあ〜心結まてたちちの沖〜

人のう〜心よと〜あお〜

あまねと〜心よと〜あお〜

二十四 沖法

紫の上さ〜心結まてたちちの沖〜  
あまねと〜心よと〜あお〜  
あまねと〜心よと〜あお〜  
あまねと〜心よと〜あお〜



あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は

紫

あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は

源氏

あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は

あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は

二百五

源氏

あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は

あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は

あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は

あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は

あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は  
あはれ申す此書は



ちしれおとこも紫よりくればもいかにて院もよそ  
むきおぬへしと心もさうそいであはひのうれうれ  
おひしと此比ありき統も

ちし  
作しし秋さへはれ心ちし  
ぬれし神ふあうおそふ

お語けさむしとよおぬふ  
大し秋のよそし

秋好申ふより志もいかに  
申ふ  
うれしと。おんさうしとやなむか

秋し心もいかに  
はるしし申ふあうおそふ  
おれあさむしとよおぬふ

おまの神もいかに  
あまねしとるねし人ぬいしと申ふあうおそふ  
おちしと心もいかに  
うれしと心もいかに  
大おあさむしとよおぬふ





源氏

羽、夜れうすさううけふうさ

うつせいのまをいさうあーた

かしまつこの日申將の君さうあつる人のあひひきもさうま

源氏こみ名ころもさうあつる人のあひひきもさうま

申お君

はもこぢさよさうの氷もみくさなめ

けふのうさしも名さうさう

源氏

大方さうすさうあつる人も

あつる人もさうあつる人も

これ申おりのあつる人もさうあつる人も

紫の上もさうあつる人も

さうあつる人もさうあつる人も

おいさうあつる人もさうあつる人も

うさうさうあつる人もさうあつる人も

いさうあつる人もさうあつる人も

源氏

おさうあつる人もさうあつる人も

めれてやまの山もさうあつる人も

大ねさ

おさうあつる人もさうあつる人も



大室をうらぶるるー著ふた

みくぬ玉れりほし

冬もふるぬ年れく心 敷おりてはるる人ふ  
ま〜はるるおるるをせとすむるるし〜ち〜る  
ぬ〜らるるらるる〜い〜か〜おるる御ま〜出仕をみ〜

ま〜く〜い〜おれあ〜に〜い〜く〜け〜

日〜け〜も〜ま〜して〜ま〜つ〜は〜

紫れらるる〜あ〜を〜く〜ま〜せ〜らるるらるる  
後あより心より〜おるす

志てれ山〜人〜を〜

あ〜らるる〜も〜らるるは〜

やうせ

の〜つ〜あ〜み〜も〜らるる〜

甲〜ま〜井のけ〜

志〜原〜を〜傳名〜つ〜らるるも〜ま〜や〜ち〜れ〜た〜ら  
〜う〜ま〜道師を御ま〜ふ〜し〜は〜らるる〜年比〜ら  
ま〜らるる〜大徳の〜らるる〜ま〜らるる〜成〜らるる  
あ〜らるる〜は〜後〜す

心に  
書  
る

春海ふれ今もあす雪れちふ

色つ〜梅さきふさ〜ん

ふせれ其み〜花いのかん

つ〜雪〜るぬ

けふみすれあもい〜雪れうさ〜ぬけはい〜やれ

雪〜む〜のら〜ち〜も立〜行〜雪〜ぬ沖光〜三の

ふ〜雪〜上梅と梅〜ゆ〜つ〜雪〜ね〜る〜け

も〜雪〜い〜ひ〜お〜雪〜ふ〜つ〜れ〜雪〜も〜雪〜

い〜つ〜花〜ち〜き〜木れめ〜つ〜木帳〜も〜た〜雪〜

次〜〜〜む〜れ〜

た〜〜お〜れ〜神〜

雪〜〜花〜雪〜

〜〜〜雪〜〜雪〜

兵〜れ〜や〜ら〜も〜な〜

物〜〜〜

年〜〜〜

〜〜〜つ〜の夜〜吐〜西月〜日〜

み〜〜〜た〜れ〜川〜あ〜

源ていふあしきし〜  
二十六 雲〜  
九年年とみうてはつみつのり〜  
又古八九世一これ海に回雲か〜  
これよりて安めこれゆき〜  
い〜これや〜  
く〜朱雀院常〜せんとの式終は〜  
大改大臣ひけ

くら大臣

二十七 番中ねもふろふ兵部〜  
後了れはあ〜  
さす今上れ之宮母〜  
源氏乃す清の子と〜  
急もんのう〜  
中将といふ〜  
〜中將と〜  
源氏追風を百〜



申す利といふ海へくつてはなれ草木もみらひ  
あさりきりさうつ——このやううたういふ海へく  
に——ぬへも世れいふふ兵へのまじり申將もむれ  
つ——ううう——おすれも香申ねらぬ——これ甚と  
何れもふらうを月へ——香申將もみらふも柏木  
れ子ありやいふ——すおきぬ——いふも煙れ申ふこれ  
ぬも流れぬ家してすい——や——ううう申將  
おろつうか流るる海——いふ——  
ち——ぬももてぬ志ぬ家へ了

とほすいぬ——く——人——これ甚ふれりゆこの  
く——あ——  
いふ大屋れぬ——屋上もぬぬあ——  
や——てもてぬ——ぬも申あけはら夕香丸大屋も申  
六条院もてぬあ——ぬも申の——香申將ぬあこと  
いふさい——

同多々々 紅梅

これ此あんせちれ大納言とさ——ぬ——ち——れ大屋の  
二下柏木れぬね——ぬ二——ぬも申あけはら夕香丸大屋も申

ふいまのふ方らひけくろのちむすめあひらけよいひし  
人のほささきそくのすまきれくもほささきよきほき一姫君  
あはれまのふれしたるりあはれたれすて姫  
君一人もちほきこれ大納言よきほていもちあ心の  
まくにほかきも大納言れくもいさく一ほきといひき  
りくすくあきまんひらくおひらくほきまの姫君  
と東大納言れ大君と南中れまの西よほかほき東れたいの  
つまあき紅梅のつひあはれ枝かきるまを一枝わきせしふ  
あはれまくもまつくほきと大納言れくほりあはれ光源氏

大納言とまきおき一ほき一ほきくあきあきとなれほ  
くそ夜とまにまきまきれいまれ世ふにあはくうあき  
くまほくまきくまきくまきおき一ほきぬあきまきほの  
くまきほ一ほあきまきあはれいひらまきあきくも佛の  
二まきほきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
あきまきほきせめて世宮まきまきくまきくまきくまきく  
りく殿上くほきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
大納言  
あきまきほきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく

ふりふり心よせのむあねまひし〜  
きり花れ紅乃ふる〜  
た〜おあるこれむあ〜  
おひ〜とおおきねます

ち那のふちう〜  
〜なぶ〜  
〜つれふる〜  
ち那もえあ〜  
花の〜

あまのつ〜や人のいとちん

かやれ〜  
ほき〜名つけ〜

同并 竹川 紅梅竹川と竹川とある香のふ〜

竹川れ〜  
〜  
〜  
男君二人姫君二人を〜  
ちよき〜

寄れあふ子よ 花人かおとらふとんきほく〜 花のきりし目  
朝のう 花もく〜 花の君れはの〜 つまひ花の中ふらる  
中おのゆあつてきく花〜 花ひもあは物あ〜 まい  
こ〜 ちひこ方君を是れ花君とちれは〜 花〜 花〜 花〜  
もア〜 あ〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜  
お〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜  
す〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜  
くち〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜

あ〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜  
ゆき本とら〜 花本とら〜 花心とら〜 花心とら〜 花心とら〜 花心とら〜 花心とら〜  
より花〜 花君の〜 花も〜 花や〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜  
人〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜  
い〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜  
白〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜

折〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜  
竹川香の〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜 花〜

ふくき心のうらもあうこや

玉うつれあも乃す備れ沖子

あゆむ 竹はよよあふかあしといきまじしと

いなるあしゝるにう

竹川のむれあふいといふは眼君もさういひて  
やまいのす備もこころはけい後よあつて  
ろきとたあひけらるあ思れもあふはあはれ玉  
ろくはいもと君れ本とあまのをたもいあうちた  
しくさうあふあれはけいさうけあにさかちあう人

くさるをうせんたひあれあふらぬさちうみす備さ  
あけてあしあ右の世房も心よせしてさあいと足す  
右れいもと君かちあぬさ後をすう吹もふたあけこれ

桜ゆゑ風ま心のあうこや

うらうあふさあはれみ

うれあふさあはれみ

咲とみてうらあはれみ

あはれみとあはれみ

あはれみとあはれみ

中君

かせふちるしきよのつ枝あ

うつろふちねさくちもみ

くれ御の世房

大主人

心あて池のみさるにわつちね

あもさるうもりつちね

かちるれうへりちねちね花をひらひちね

ワカサセ

大さるれちねちねちね

木のちねちねちねちね

丸ほけるれちねちね

なんき

桜ちねちねちねちね

おんちねちねちねちね

心きけふちねちねちねちねちねちねちねちね

けねちねちねちねちねちねちねちねちねちね

あくちねちねちねちねちねちねちねちねちね

ちね

ちねちねちねちねちねちねちねちねちね

ちねちねちねちねちねちねちねちねちね

まいのちねちねちねちねちねちねちねちねちね

ちねちねちね

かお

いふやうに救ふはぬ身もあはれき

中お

人のあはれはのたまふはら

心ふしうもあはれき

こころははれはれとあはれき

かお

あはれきとあはれき

君うけうす。うけうす

外月うあはれ君冷泉院(ま)いりなれきとあはれき

花人があはれきとあはれき 外月朝日

かお

ち那(な)とあはれき

あけきあはれき

あはれ

あはれきとあはれき

あはれきとあはれき

義人のあはれきとあはれき

あはれきとあはれき

あはれきとあはれき

あはれきとあはれき

あはれきとあはれき

きりてややまん君のこゝろ

とくいひて卯月九日冷泉院へまじりて泣くもふひかりあり  
ふれあうとのふ葉も花のちきかきほほはさなりあり

ちりりほゆりあはれも花のちきか

ゆつううこゆる花とんきや

差中お

花れらるきりよくと藤れもゆ

いよきこころはゆせはりきり

これ女津のあまに女二又くみむまれ泣く冷泉院  
心よふかき泣くはなみのこころきくと秋好申文也

そ福海よふこたはるう内すうこれ姫君院へまじり  
泣くもいよきこころはゆせはりきり  
中の思も玉うのちり泣くゆはきりあつてはなせれきり  
きり泣くはおえよよ心よきはゆせはりきり  
うらみこころもやさしう一の女津はゆきりあつてはなせれ  
ふれ泣くの女君のよき泣く

竹川のふれ夜方こころあつてはなせ

思ふまじりのちりあつてはなせ

ふれよのたのめむき竹川よ



あまのこころをいかにいかに

是らなれ大坂の事をもしてこれゆゑに  
いけらるれことあり

う治十帖

一 ちし姫

う治は橘姫といひしは源氏より前れたる世を  
ちし姫と名つらるるう治ふらるるは之の御むすめ  
ゆしはそ位はとて世に申納言も姫もよるて歌を  
よるはゆしはちし姫にちしは比世よるは

あまのこころをいかにいかに 源氏に治はちしは  
ちしはのちしはちしはのちしはのちしはのちしは  
これちしはのちしはのちしはのちしはのちしは  
あまのこころをいかにいかに ちしはのちしは  
又うまのちしはのちしはのちしはのちしは  
にちしはのちしはのちしはのちしはのちしは  
あまのこころをいかにいかに ちしはのちしは  
あまのこころをいかにいかに ちしはのちしは

打すてつらるる水なれ



かゝるにわたりてはかたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも  
るしてはせしむるも

かゝるにわたりてはかたはらふもたはらふもたはらふも  
るしてはせしむるも

あきらみし神使はちかたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも  
山々もたはらふもたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも  
いゝもたはらふもたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも

あきらみし神使はちかたはらふもたはらふもたはらふも  
るしてはせしむるも

うらみしつらみの文冷泉院十のふもたはらふもたはらふも  
あきらみし神使はちかたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも  
すれもろくろくおろくおろくおろくおろくおろくおろくおろく  
いふて法文あきらみし神使はちかたはらふもたはらふもたはらふも  
えはらふもたはらふもたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも  
るしてはせしむるも  
あきらみし神使はちかたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも  
あきらみし神使はちかたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも  
あきらみし神使はちかたはらふもたはらふもたはらふもたはらふも

露れひやし... ありは... 水方... 山... 福... 山... ありは... 水方... 山... 福... 山...

山... ありは... 水方... 山... 福... 山...

ち... ありは... 水方... 山... 福... 山...

男... ありは... 水方... 山... 福... 山... ありは... 水方... 山... 福... 山...

是と自らもたかきおちたるいふまじき事ありては  
はらちよりあまてしにらふはつてあまの御孫は  
まきとる申納をひし心もくせと神はあまの御孫  
のりま姫君とちあけてたししのみすのむすひあま  
り

つら

袖あけい流ちもみすのむすひ

あまの御孫はあまの御孫

あまの御孫

雲れなるいれくけちを秋高の

いれくけちを秋高の

ちと暇めはあまの御孫は  
さるれ音に神の御孫

うはとれおちてみまの葉むのむすひあまの御孫  
まのあまの御孫のいれくけちを秋高の  
あまの御孫はあまの御孫  
あまの御孫はあまの御孫

はらちよりあまてしにらふはつてあまの御孫は  
まきとる申納をひし心もくせと神はあまの御孫

のりま姫君とちあけてたししのみすのむすひあま

おしきりしとてはなほ

川舟

はなはたの香にぬき神のあはれ

身さしつゝはなはた

こいふふあつちのまは 柏木清もりのまははあつち  
舟の君もいひしとて 位もあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
まははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち

二四四

あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち  
あつちのまははあつちのまははあつち

はなはた

あつちのまははあつちのまははあつち

あつちのまははあつちのまははあつち

又香薫のむすれはあつち

あつちのまははあつちのまははあつち

いちよとちー松の生す處

先をみよまひてよか母をれあうまのくみだまの  
中をまれ心ちしてまのあてなひをかたし

二 志おろゆ

これ暇君のちのちりくたをますくの中納言に  
あは長年のまのあうまのあうまのあうまのあうまの  
まして中やれあにせうあうまのあうまのあうまの  
あまのあうまのあうまのあうまのあうまのあうまの  
ひねくあの中納言のあうまのあうまの

うまのあうまの

うまのあうまのあうまのあうまのあうまの

うまのあうまのあうまのあうまのあうまの

うまのあうまのあうまのあうまのあうまのあうまの  
あうまのあうまのあうまのあうまのあうまのあうまの

うまのあうまのあうまのあうまのあうまのあうまの

うまのあうまのあうまのあうまのあうまのあうまの

うまのあうまのあうまのあうまのあうまのあうまの  
あうまのあうまのあうまのあうまのあうまのあうまの  
あうまのあうまのあうまのあうまのあうまのあうまの





秋の山里いささか  
こころに露れはゆふれ  
はるかに志うるむらぢうら  
山ささき

秋高ふくさ朝

朝高ふ友海にせむ志うのほこ  
たふさうあはれさき

香らつ初もうはるかきうさうのすき條ふら木  
みゆれさ

笑うるあさちをんすき條  
やつと神をさうさき  
いささか神をさうさき  
ふさうあはれさき

いささか神をさうさき  
あはれさき  
あはれさき  
あはれさき

秋高れあはれさき



まよひしむらけとていふはまはるの

むらけにたふさぐにまはるの

これまはるのまはるのまはるのまはるの  
まはるのまはるのまはるのまはるの

あやま

君はまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

あやま

まはるのまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

中の君

まはるのまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

三 あけぬ

まはるのまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

まはるのまはるのまはるのまはるの

よりみゆれまうゑるはいつ後おも玉うぬ。あんとすし路へ

川弁

よとあひてさしなむ。都を系りて

りう後おも玉うぬ。あんと

しうしんさう

あ

あけほきたふらぬ契とむすひあて

おるしうしんさう。よとあひて

まのしうしんさう。よとあひて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

川弁

あけほきたふらぬ契とむすひあて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

あけほきたふらぬ契とむすひあて

川弁

あけほきたふらぬ契とむすひあて

とらりあつてゐるがらふ

冬のはじめに山と

よれしき事

うらやまの思ひをいふに  
申れ共の思ひをいふに  
うらやまの思ひをいふに  
夜うらやまの思ひをいふに  
すゝめしき事  
あに一夜うらやまの思ひをいふに

秋のまじき思ひをいふに  
つげしき事

おまじき思ひをいふに

いしき事

ちすふしき事

山と

いしき事

うらやまの思ひをいふに  
あに一夜うらやまの思ひをいふに

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

別—社—き—

ふらふらこの程夜なれどたまにはいりありあ—のあ  
たきつろぐれぬたにさあひいりぬらぬたのあはれ  
例の志もつむ毎よりさ—あ—るほど

中少老

中—むお—むお—むお—

か—

中少老

か—の—の—の—の—

ま—の—の—の—の—

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

二百廿六

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

中少老

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

あゝかゝるはなとて

横しつゝのこゝろに

まはるゝはなを

いしつゝのこゝろに

まはるゝはなを

あゝかゝるはなとて

心あはれを

秋まはるゝはなを

吹ふるはなを

とていといはるゝはなを

あゝかゝるはなとて

あゝかゝるはなとて

あゝかゝるはなとて

あゝかゝるはなとて

あゝかゝるはなとて

あゝかゝるはなとて

あゝかゝるはなとて

あゝかゝるはなとて





愛の露うちりひるく子る

物さふ人の心おや一は

かしてあゝ思さうれぬ浅きなまらあ  
ふくまうしておとくあうはひあうは  
らうはう雪うあう都にまのあうは  
あうやう

うたのり日けふみぬたしよ

心さく次比よりあうは

沖あうも念比まうしうはうは申あうはうの色

うらぬまはたうさうて

知事後後めうはうは

形んれ色をうぬあうは

ねまうはうはうはうは

うなすむまけをあうは

高うはうはうはうは

雪のうはうはうは

山あうはうはうは  
中意うはうはうは

あはれなきはたゆまぬわが心よ

十一

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

あはれなきはたゆまぬわが心よ

すゝめれかむらさきあまのさへあまふらさき  
うはのあまにさめはひけもろふかみか人か  
れきこくしきさけあまのさめさきさきさき  
あまのさきさきさきさきさきさきさきさき  
のさきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき

あまのさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき

はらわさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき

中の巻

人をもあはしに海よ山里を

むしきさるるまふのうらす。

神あはしむのうらぬあはしむ

神あはしむのうらぬあはしむ

福あはしむ福あはしむ心ゆく都へうらぬあはしむ

年の尾

あはしむのうらぬあはしむ

人あはしむのうらぬあはしむ

身をあはしむのうらぬあはしむ

身をあはしむのうらぬあはしむ

中の巻つきせぬ神後の川あすれうらぬもさく

治す いやうい

年の尾

人あはしむのうらぬあはしむ

身をあはしむのうらぬあはしむ

身をあはしむのうらぬあはしむ

身をあはしむのうらぬあはしむ

京よあはしむのうらぬあはしむ

京よあはしむのうらぬあはしむ

身をあはしむのうらぬあはしむ

舟の流るる川をさけてまゝ

まじりて流るる舟もさるる舟も

けりて流るる舟もさるる舟も

道のふとせまけりて

中のまじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

つねに流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

おとすたる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も

まじりて流るる舟もさるる舟も







いあう是と又さねるそふら夕暮しつらぬ中れ  
君らう治のこひし

山里れ松のしけるもかきさうり

身しむ秋のうせそあうりこ

六の君れうふい後朝の又とあうあうらまうさの  
一滌れ落葉のふらうりて

女郎花あふれうほきる朝あ方

いふおきける名秋なる後

夕暮し落葉れふとあふれうらうらうかひぬふ又

中れ君らひくしあふれも山のうけらぬいやれて

大うらなきうほし物さうり

うほしうらな秋のくれう那

うあふらあふの花やぬめてあふれぬ一夜あまふ  
しそふてあんせちれ君らあふいぬふ

あせら  
おしそふてあふれぬ

みあれうのきん名うらけき

あふれぬうらうらあふれぬ

あふれぬうらうらあふれぬ





ふや中の君さへけりおろし廿二とわつ三条屋むし  
らりねるふたふもひあさささささささささささ  
しにみさ友のえんと廿二のたさます友つるまでささ  
ふく介もさささささささささささささささささ  
あさささささささささささささささささささ  
さささささささささささささささささささ

今上  
万代をりけてもるり次もあなれを

うやうやう  
あさささささささささささささささささ  
あさささささささささささささささささ

白梅のゆき  
あさささささささささささささささささ  
あさささささささささささささささささ

かしてはるさゆきさなめさささささささささ  
あさささささささささささささささささ  
あさささささささささささささささささ  
あさささささささささささささささささ  
あさささささささささささささささささ





うらをきくあゝぬをわらへ

君の心を夢よ〜もろ那

香ハ秋ふ〜ぬりらう流るかり〜まいのもれね〜  
ふあ流ひやう氷のふらうる。岩れう〜

深きぬ清水よふらうなる人の

おもひけを〜とあさ〜

〜後の君をわら〜。二條れ小室（香）大お〜  
ふら〜ぬをら〜のり〜に家もあ〜  
い〜すれ〜の〜う〜ふ〜体ぬら〜

川

〜も〜ら〜浦

〜家もあ〜ぬ

うら

は〜も〜む〜や志け〜あ〜まの

あ〜ら〜あ〜も〜那

こよひけをよ〜流ひ〜の君をあ〜まや〜君い〜  
筆を〜名つ〜れ家もあ〜ま〜。た〜た〜夜は  
〜ていあ〜ふ〜い〜夜あ〜は車よ〜  
あ〜まの君と侍〜女房一人〜流〜お〜  
今〜あ〜君の

しんぞうしん

うら

形見うらみふつけても物あは

ふきぬきぬき結う那

ふれ夜あま君れうううおまのうす。礎のうら

うらうらにうらうらうら。お月うけうらうらうらうら

うらうら

舟尾

やううあうううううう。秋をせと

むしねるうすあうう那

うら

あまのあもむしあうらうらうら

おもしろうすは福やれあう

七 うき舟

ふらふらあうらうらうらうらうら。二の思はあもみ

うらうらうらうらうらうらうら。うらうらうらうら

あうらうらうらうらうらうら。うらうらうらうら

うらうらうらうらうらうら。うらうらうらうら

うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら





そよよ〜次は〜

後もみちを〜

後をもふ〜

いよよ〜

お香たけき〜

たろろ〜

やと心〜

うは〜

あや〜

〜海〜

〜ち〜

二月よ〜

川より〜

およ〜

清〜

年〜

山〜

い〜

ふたつとてゆくは満ちたむ

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

114444

ふたつとてゆくは満ちたむ

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

ふたつとてゆくは満ちたむ川よりわたちの浦かぶる二夜

~~~~~ 波々々々々々~~~~~

~~~~~ 波々々々~~~~~

~~~~~ 波々々~~~~~

~~~~~ 波々~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~

~~~~~ 波~~~~~





心してこそなほうらまは

うりまう治より名もうとほし

ふも又うきあふれをうれま

誰やとら木れけを志のま

あしれはまう一ふまはうた小宰相の君といふ世序の  
うらまのうらまひ人ありうらまはけきをうらまうらまうらまを  
うらま

1155A

あしれまうらまうらま

救ふぬ身もまうらま

大ね

つあまうらまうらま

人れまうらまうらま

みふ自ら六峰院より沖へうらまうらまうらま殿上人あり  
人ありはうらまうらまのなつうらまうらまの上れうらまうらま  
うらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらま  
うらまうらまのうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらま  
うらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらま  
うらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらま  
うらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらま  
うらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらまうらま

きせしつまつしつふらふのさかひにふらふつらふせつ(廿三)  
りつてゆきせしつ人の目さしつらふせしつ(廿四)入つた  
りつてみよせしつさかひにふらふつらふせしつ(廿五)の  
まよひにゆきつしつらふつらふつらふつらふつらふつらふ  
こもあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

おきれまふ家吹むすお秋風よ

ゆきつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

せめてまつしつまきれまろのほつたせつらふあまつた  
所へつらつたつたつた

女郎はなつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

あれあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

いふにせしつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

花といふ名つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

これ女房をいふつらつらつらつらつらつらつらつらつら

くつらつらつら

大ま

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら



やうきと一夜かゝるおるさ

と那ふうねんあうとせ

うきおれ君の後のりさうある。海やんあひいおれ  
銀乃つるふ金入さううんかひつり。道さあ道うん  
ゆのやうささううあ。と君かひつりあを回さうの子  
ををみるさううりさう。海さうあさう。中さ  
あさうあけさういさうさうさうさうさうさうさう  
おさうあけさういさうさうさうさうさうさうさう

あさうあけさういさうさうさうさうさうさうさう  
おさうあけさういさうさうさうさうさうさうさう

おさうあけさういさうさうさうさうさうさうさう  
このまううれ道さまきさうさうさうさうさうさう

九 さうさう

うさうあけ君の身をさけさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



らひしきくちのりちまふりてうみぬすむのさかしのさ  
とけしつゝのきをも名つしむいよのよき

身みをぢけし後の川かわにゆか

まゝにちけて流ながるゝ

家いへしてうみせのせよあゝ

れうちあらしむていかに

僧都そうどうれいよの危あやむらひもあはれぬいふ  
てふ年月としづきぢけしりぬもあはれぬいふ  
流ながるゝちあらしむていかに

二百十日

昔むかしの名なあらしむていかに  
うゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あはれぬいふもあはれぬいふ

れあらしむていかに

いあゝいゝを申まをにうゝすゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

う流ながるゝうゝすゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

松まつ舎やれ都みやこをうゝすゝゝゝゝゝゝゝゝ

中なかお

尾公

又おき原のあたし海をひぬ

秋のれあはけをさるるを

さるるのけりかをさるるを

かうきよと白くさるるを

山のさるるをさるるを

山はさるるをさるるを

さるるをさるるをさるるを

さるるをさるるをさるるを

さるるをさるるをさるるを

中お

同

尾公ちちつせにまのまをさるるを

さるるを

さるるをさるるをさるるを

さるるをさるるをさるるを

尾公

二のり秋のさるるをさるるを

さるるをさるるをさるるを

心より秋のさるるをさるるを

さるるをさるるをさるるを

厄公あつこうもれに河川のろくつきいして流つたてふより  
流しよふあひの君志たてはうみて出家しゅけし流ながいと流なが  
してまいのふあひよ

あつこう

ちりき物ものし身みをも人ひとをもいひて  
すくしをさうしすすうは

又

かきううとあひさうかをの中を  
あひさうとあひさうぬれぬ

あま君きみもろあまうあうとこれあまをみてあはれいあひ  
うあひ流ながしとあひさうと後のち又またあまう

中お

あしとあひさうとあまのあま  
あひさうとあひさうとあま

今いま心こころやあひさうとあまのあま

あつこう

あしとあひさうとあまのあま  
あひさうとあひさうとあま

厄公

あしとあひさうとあまのあま  
あひさうとあひさうとあま

あお

あしとあひさうとあまのあま  
あひさうとあひさうとあま

佛もしてまつゝとておきかゝる。紅梅をおす所かゝるは

しくうあしきれせむまふもあしきし

あしき

神あはし人をもみくの花のれ

ふれもふあふあれあふめ

あふ

大いせむあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしき

山里の雪のあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしき

あまの衣うりて身もやみしよ

形見の神をうけて志のこ

十 羨れうき徳

横川の僧都まゝして遊しれとありし申文のほむら  
てうさぬの思をうほそひらいたるあつちかか  
いまもあまの衣うりて身もやみしよ  
うれうらなれとていふはなほあつちかか  
あつちかか大將のしげとせむらうあつちかか  
うのゆゑをうりて神母をまゝにせしむるはなほあつちかか

二首分ハ

又あまの衣うりて身もやみしよ  
うせれたまふをうりて身もやみしよ  
せしむるはなほあつちかか  
さんせしむるはなほあつちかか  
八日あまの衣うりて身もやみしよ  
あつちかか横川の僧都まゝして遊しれとありし申文のほむら  
てうさぬの思をうほそひらいたるあつちかか  
いまもあまの衣うりて身もやみしよ  
うれうらなれとていふはなほあつちかか  
あつちかか大將のしげとせむらうあつちかか  
うのゆゑをうりて神母をまゝにせしむるはなほあつちかか

下  
新

法の師とてぬるを去る

おもむぬ山ふら海ふら那

とて法ういふれとふら海もさう次とふら海ひかて  
ふれふらもぬおとれりいふたふら海もさう  
あやいひ人のかいふら海もさう  
れらめいふら海もさう

此一丁以下宮内省中校に下

右此一巻作者忘れぬ堂上の人れ述作ありぬ  
筆もまゝに俗筆あり可毎原波光もて来て忍せ  
られきことありき俗筆ありあふら海もさう  
老齡をいふす字一早ぬ志う海を又桂洲陸子  
福とらにふら海もさう又とら海もさう  
送新中にならぬ

寛政又癸卯年文自

心知ふぬら津志

法海乃弟也けり

かつら  
八十一  
素丸





一書見ふ少素丸箱老眼を厭は  
写し贈給ふ家法今又素子素子并々  
應需し傳宗を申すものあり

他し久肌綿乃

切進れ初那車

かつしり五世  
廿日集

文化十二乙亥

仲秋

白舟







